

アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：君に届け

今回のテーマ

恋愛について考える

I. 恋愛は転移からはじまる

II. 恋愛は人との距離を縮めること

III. 恋愛はエディプス葛藤にむきあうこと

I. 恋愛は転移からはじまる

転移とは？ 出会いは転移から

精神分析の創始者であるフロイト（Freud,S）がクライアントの治療を通して発見した現象で、過去の重要な対人関係で形成された感情、態度、期待、行動パターンを、現在の対人関係に無意識的に転写すること。

転移は人間の心理として自然な現象である。日常生活のあらゆる対人関係において、程度の差こそあれ転移は生じている。

とりわけ情緒的に不安定な時期に受容されることで、過去の重要な対象との関係性が転移として再現されやすくなる。

恋愛のアニメは一般的に転移からお互いに惹かれ合い、恋愛が始まっていく。「君に届け」も同様に、風早くんは優しく道案内してくれた爽子に対して陽性転移を抱き、一方の爽子は、風早くんが彼女の日常的な貢献を理解し見守ってくれたことを知り、彼への陽性転移を形成していく。このように、互いへの理解と受容を通じて、両者の間に転移が生じ惹かれ合っていたのだと考えられる。

陽性転移が起きる中で、爽子は、風早くんに近づきたい一方で、風早君を理想化する中で他者との関わりを持つようとし始める。理想化し、自分も風早くんのようにになりたいという思いもあったように感じられる。

しかしこれは飽くまで、爽子が抱く風早くん像であり、彼女の内的対象であり、実際の風早くんではない。

風早くんと対等な存在になるにはまず、彼を深く知ることであり、それは彼との距離を縮めていくことである。

II. 恋愛は人との距離を縮めること

恋愛関係になるということは、物理的にも心理的にも相手との距離が非常に近くなることだと感じる。しかし相手と深い関係になれるかは、なかなか確証が得られるものではない。それ故に、相手の一挙手一投足に一喜一憂し、心が揺さぶられる。

肝試し大会で風早くんと二人きりになり、2人の距離は少し近づき、爽子は今まで体験したことのない感情に浸るが、その後、クラスメイトから二人の関係を冷やかされる場面では、風早くんが爽子を守る行動を取る。そこで爽子は一度近づいた風早くんと距離を置くことで事態を収めようとする。それは爽子が今まで築いてきた自己防衛的な反応である。

しかし、爽子は風早くんとの中で、ときめいた心を止めることができず、「傷つかないように距離を置」こうとする自分に葛藤する。

登校時の再会場面では、クラスメイトと風早くんからの謝罪の品に感極まって涙を流す爽子だが、彼女はまだ風早くんの真意を理解せず、自己防衛的な態度を継続している。こ

の背景には、爽子が自分を風早くんと対等な存在として認識できず、彼を手の届かない憧れの対象として位置づけている心理がある。

「君に届け」というタイトルが示唆するように、物語は爽子が自己防衛の殻を破り、特に風早くんと心理的距離を縮めていく過程を描いている。しかし爽子が風早くんと対等に付き合うには、自身が心の中で抱えてきた理想化した風早くん像を壊し、実際の風早くんの存在を受け止めていく必要がある。それは思春期に再び訪れるエディプス葛藤に向き合い、乗り越えるという意味でもある。

2. 矢野あやねと吉田千鶴との友情

「君に届け」における思春期の葛藤と成長

爽子は風早くんという「良い対象」に支えられながら外的世界との関わりを広げていく。矢野や吉田との友情が芽生え、クラスメイトとの距離も縮まっていくが、そこには思春期特有の葛藤や困難が伴う。

思春期（Adolescence Process）は二次性徴に伴い心身に大変動が生じる時期だ。潜伏期に収まっていたエディプス葛藤が再燃し、アイデンティティが揺らぎ、社会的・家庭的秩序が問い直される。慣れ親しんだ生き方が試される局面である。

この年代の若者は「妄想分裂ポジション」と呼ばれる思考傾向になりやすく、物事を白黒はっきりと二分法的に捉える。自己中心的視点から世界を解釈し、自分の外見に過剰な意識を向け、常に他者からの評価を気にする傾向がある。

爽子もこの思春期的混乱の中で揺れ動いている。周囲を迫害的に捉える一方、親しくなった相手を「夢のよう」と理想化する両極端な認識を示す。彼女は無意識のうちに外の世界を「悪い対象」と捉え、迫害不安を抱えている。そのため悪口に敏感に反応し、自己否定感が強まると他者との距離をさらにとろうとする。しかし風早くんという「良い対象」の存在が、彼女の変化を促していく。

例えば、席替えでも「貞子の近くは避けたい」という雰囲気傷つきながら「いつか『この席になれて嬉しい』って誰かと言えたらな」と願う。それは爽子の心の中の「風早くん」という内的対象に支えられているからこそ、そう感じるができるのだろう。そしてその思いが成就し、風早くんが隣の席を希望し、矢野と吉田も近くに座るという出来事が起こる。

この経験を通して爽子は風早くんへの感情が「憧れも尊敬も飛び越えて」「大好きな気持ち」へと変化していると自覚する。これは単なる恋愛感情だけでなく、主体的に他者と関わりたいという内的変化の表れでもある。やがて彼女の講義ノートが評価されることで、クラスメイトからも受け入れられるようになり、社会的世界が広がっていく。

→しかし瑣末な噂が広がっていき、爽子と周囲の人たちへの溝が生じていく。

3) 噂、いき違いからの誤解

風早くんとの距離も近くなり、矢野やちづとも交友関係が形成されそうな時に、彼女らの関係性を壊す様な噂話（吉田が元ヤンで少年院に入っていた、矢野が色んな技で百人斬りしていると貞子が吹聴している）が広がり、そのことに加え、些細ないき違いから、彼女らとの関係がギクシャクしていく。その中で爽子はトイレで噂を聞く。

それは「貞子（爽子）が吉田と矢野をバックにつけて、風早くんをいいように使っている」という、ありもしない噂であり、それで「貞子につきまとわれてたら 株を落とす」という話を聞き、爽子は自分が本当は矢野や吉田とを傷つけており、いつか風早くんも傷つけてしまうのではないかと、自分が周りにいると迷惑になる、離れた方がいいと考え、彼女ならびに風早くんからも再び距離を取ろうとする。

その異変に気づいた風早くんは爽子を呼び止めたときに声をかけたときに爽子は咄嗟に避けてしまい、葛藤する。その苦悩する姿に風早くんが声をかけたシーンを前回扱った。

【考察】

元々殻に閉じこもりやすい爽子は、風早くんをはじめ、矢野や吉田、そしてクラスの人

たちからも受け入れられていく中で、自分の願いが叶いつつあることに強い喜びを感じていたと思われる。しかし、噂話（ある意味、自身が周囲に迷惑をかけているのではないかという内的空想の投影でもある）や些細な行き違いから、対象（風早くんたち）を傷つけてしまったのではないかという罪責感に苛まれることになる。

爽子は彼らとの距離感が不安定に感じられ、現在の関係性に恐れを抱き、自分自身が傷つくことを恐れるあまり、反動的に再び距離を取ろうとする。対象関係論の視点から考えると、爽子の心理状態には迫害不安と抑うつ不安が混在しているようにも見受けられる。

しかし風早くんに話を聞いてもらい、「俺は.....俺のしたい様にするよ 黒沼と喋りたければ喋るし 喋りたくなかったらこんな風に喋っていない！ ...噂なんてどーだっていい。俺にとっては俺を見てる黒沼だけが黒沼だ！！」と言われたことで変化が生まれる。この言葉を通して、自分がどうしたいのかという思い、つまり主体性を持つことの大切さを教えられた爽子は、距離をとり退避しようという思いよりも、風早くんとそして矢野や吉田と距離を縮め、仲良くなりたいという思いが勝るようになる。

こうして爽子は現実に向き合おうという意志を強め、噂に対峙していくのである。

4) 噂との対峙

爽子がトイレにいたときに、大勢の子（A組の女子達）が入ってきて、貞子には吉田と矢野がバックについているという噂を直接聞き、噂を話している子たちと対峙する。

そこで明らかになったことは風早くんをめぐる壮絶な争いであった。

A：あ——そーいやさ—— 貞子のウワサあったじゃん

B：あ—— 霊感じゃない方の 吉田と矢野がバックについているっていう

爽子：噂.....

A：それがどーやら 最近あいつらさあ.....

爽子：ごっ.....誤解だよ！！

爽子はトイレの扉を開けて毅然とした口調でいう。

その後ヒリヒリとした沈黙が流れる。爽子はその沈黙に押しつぶされるようにオドオドした口調になる。

爽子：だから.....えっと、それは嘘情報なので！

爽子：矢野さんと吉田さんはすごく優しいひとなので！！

A：出たよ 貞子！！

B：あはは なに言ってんのこの子！

A：やさしいだって！！

B：あたしらと喋りたいんじゃない！？

A：つかなんかこっちにらんでない！？

爽子：これはこーいう顔で あの...だから矢野さんと吉田さんのことは誤っ.....

大勢の子のひとりが壁に爽子を押し付けて、片手で壁を叩く

B：うるっさいな わかってるよ

A：吉田と矢野でしょ？ あの犯罪者なヤンキーといんらんね

その言葉に爽子の表情は変わり、毅然とした表情になる

爽子：(自分に言い聞かせるように) がんばれ

爽子：さっきの言葉 取り消して.....

爽子は押し付けられた腕を握る

A：はあ？何この手... 話してよ

爽子：...誤解している 今、言ったの間違いだよ！

B：ちょっと聴いたあ 今の！

爽子：矢野さんと吉田さんはそんな人じゃないよ！

(略)

A：そんなのどうだっていいんだよ こっちはあんたの周りに吉田や矢野がいない方があんたと話ができるしね。 まああの2人だって てきとーに面白がってあんたとつきあってたんだろーけど、もう飽きたんじゃないの？ ...あんただってそうでしょ

爽子の胸を足で踏みつけながら言う。

B：2人に近づいたのも風早目当てだったんでしょ？ そんでもう邪魔になったんでしょ？

A：目障りなんだよね みんなから離れて1人でおとなしくしててよ。 そしたらあんたから手一ひいてやっても

爽子：違う！！（重ねるように強い口調で言う）

爽子：手なんか引かなくていい。 だから...取り消して！

B：はあ お前何言って

爽子：全部、全部違う みんなは...何もわかっていない！みんなは...何も知らないから

爽子：私が避けられる中で...怖がらないで...避けないで...どんなに...2人がやさしくしてくれたか...何も知らないから 私がどれだけ矢野さんと吉田さんを すきよりもっと..... だいすきな の だから...

そこで、その大勢の子と対峙していた爽子の言葉を聴いていた矢野と吉田が間に入り助けに入る

そして爽子は矢野と吉田にいう

私...今まで「しょうがないな」と思ってきたよ...

...「また だめだったな」「しょうがないな」 みんなと仲良くなりたいと思う一方で きっと諦めてたんだと思う。 ...だけど私がそばにいることで2人に変な噂が流れてまた傷つけるかもしれないって思っても それでも ...どうしても諦められなかった。

【考察】

風早くんに支えられる中で、爽子は吉田や矢野が自分にとって大切な存在であることに気づいている。しかし爽子は周囲の噂に動揺し、自分がそういう情緒を持つことに揺れ動きが生じてきていた。

しかし風早くんの言葉「俺は.....俺のしたい様にするよ黒沼と喋りたければ喋るし喋り

たくなかったらこんな風に喋ってない」によって、爽子は重要な気づきを得る。相手に情緒を向けることは迷惑ではなく、人と関わるには大切なことなのだ。

この気づきを得た爽子は、自分にとって吉田と矢野が大切な存在であるという思いを大事にし、トイレで女子たちの噂に勇敢に対峙する。

その強固な思いは、何か太宰治の「走れメロス」のメロスとセリネンティウスの友情を彷彿とさせる。一方で太治は「人間失格」で極度の人間不信心や自己嫌悪、社会への適応不全を憂慮している。信頼し得る現実の人間関係に絶望していたからこそ、メロスとセリネンティウスのような絶対的な信頼で結ばれた友情を強く求め、理想化して描いたとも考えられる。この視点は「君に届け」の爽子の心理状態にも似たものがあるように感じられる。爽子も人間関係に対して不安や恐れから防衛的な殻に閉じこもりながらも、心の奥底では深い人間関係を切望していた。それだけ爽子は元々対人希求が強く、そしてそれを風早くんを始め色々な人に受け入れてもらえたこと、それがクラス内の交友関係を広げていったと考えられる。

その後胡桃沢 梅という男子生徒からの憧れの的の女の子と対峙していくことになる→エディプス葛藤への対峙

Ⅲ. 恋愛はエディプス葛藤にむきあうこと

矢野あやねと吉田千鶴との関係は一旦は近づくものの、色々な噂に翻弄され、彼女らとの関係が一時期ギクシャクしてしまう。しかし風早くんのサポートもあり、爽子は噂元の人達と対峙し、改めて矢野と吉田が爽子にとってかけがえのない存在であることを深く理解し、彼らとの友情はより強固になっていく。

その一連の過程が爽子の人との距離感を巡る葛藤を投影しているように感じられる。今まで殻に閉じこもってきた爽子は矢野と吉田と親しくなり、一旦彼女らとの距離感が近くなる。すると急激に距離が近づいたために、爽子自身 PS ポジションになり、二人への迫害不安や相手への加害意識も出てきてしまい、関係性の維持が怖くなり、自ら距離をとり、元の状態に戻ろうとする。(そこいらの心の動きが、所謂心的平衡なのかもしれない)そこ

を止めてくれたのが風早くんである。風早くんが爽子の人間関係を巡る情緒的葛藤を受け止めてくれたことで、矢野と吉田との友情関係が確固としたものとなったと考えても過言でないと感じられる。(その点が竜とそばかすの「U」という潜在空間と違う印象を受ける。)

それから爽子はクラスでの交友関係がひろがり、日々の生活が彩りをもったものになっていく。そこで、憧れの風早くんと付き合うようになるまでには、もうひと段落、風早くんとの距離を縮め、彼と対等の関係になっていくことである。ある種それは爽子自身が憧れの中に入っていき、叶わないと感じてきた対象と対等になっていくことである。

それはまさに爽子自身のエディプス葛藤に向き合うことである。

1. エディプス葛藤とは

エディプス期（～6歳）**父・母・自分の三者の葛藤**：社会性の芽生え

ギリシャ悲劇のエディプス王（父を殺し母と結婚する話）から着想

子どもは異性の親に結ばれたい願望があるが、一方で敵わないとも感じる。

社会性（自分でも母でもない第三者の出現）の獲得と未熟さへの葛藤

→父・母の関係性には叶わないと感じている一方で対等な関係を形成したいと考え、葛藤する心性。